

氏名： 吉田 美紀	実施国： パレスチナ自治区	協力活動
-----------	---------------	------

活動名称	パレスチナ・ガザに住むシリア難民のためのレストラン開業による自立支援事業
------	--------------------------------------

実施期間	2016年9月1日 ~ 2017年9月30日
------	------------------------

(1) 申請した動機

パレスチナのガザ地区では、イスラエルによる陸・海・空からの封鎖によって、人やモノの行き来が厳しく制限され、また、繰り返される戦闘によって多くを失い、人々が国連などの支援によって日々のニーズをかるうじて賄いながら過ごしている。失業率は4割を超え、特に若者は職に就くことが難しく、若い女性に限れば失業率が8割以上になるなど状況は深刻である。建築や医療など、ガザで必要とされている職種においても仕事がなく、たとえ大学を優秀な成績で卒業しても仕事が見つからないケースも多い。水質汚染や停電も重なる中であらゆる経済活動に絶望感が広がっており、宗教的に禁止されている自殺も増えてきている。

2011年に始まったシリア内戦によって、多くの人々が平和な地を求めて母国を離れた。その一部はトルコに逃れ、ギリシャに渡り、さらにヨーロッパ各地を目指しているが、同じ中東のヨルダンやレバノン、そしてパレスチナに逃れた人々も大勢いる。内戦前からシリアに住んでいるパレスチナ難民やパレスチナ系シリア人も内戦の影響を受けている。難民としてシリアで暮らすパレスチナの人々が、内戦によって再度住処を追われて二重で難民となったケースも少なくない。現在、ガザにいるシリア難民は、シリア国籍を持つ人が約70名、配偶者のどちらかがパレスチナ人の世帯が200ほど存在しているという（正確な統計はない）。

ガザに暮らす人々の生活は厳しく、シリアから来た難民を十分にサポートする体制が整っていない。シリア難民の多くは、ガザとエジプトの国境に存在していたトンネルを通してガザに来たが、2013年エジプトで起きたクーデターによるモルシー前大統領の失脚以来、それらトンネルは封鎖されてしまった。国境が四方から封鎖されたガザは外部との交流や経済活動を行うための重要なルートを失い、人々の生活が苦しくなる中、2013年のクーデター以前にエジプトからガザに入域したシリア難民らは、ガザを出る手段をなくしてしまった。さらにガザでは、2014年夏に50日間もの間続いたイスラエル軍による破壊の影響を受け、ガザに住むシリア難民の中には戦闘が続く母国シリアに留まった方が多かったと話す人もいる。

これまで、ガザにあるイスラム大学の学生を中心としたボランティアグループと共に、30件以上のシリア難民宅を訪問し、チャリティで集めた衣類や食料を届けたり、小規模ながら金銭のサポートなどを行ってきた。しかし、シリア内戦やガザ封鎖の先行きが見えない中、元々自国で自立した生活を送っていたシリア難民の多くが「これ以上、人から与えられる生活ではなく、仕事をして自立し、人間としての尊厳を守りながら生きて行きたい」と訴えたため、それぞれの家族にどのような技術を持っているのかと尋ね、プロジェクトの計画を立てた。

多くのシリア人女性らは、自分たちが仕事に活かせる技術として「料理」をあげた。シリア料理はパレスチナ人の間でも人気があるが、ガザ地区内でシリア料理を提供している店は少ないので需要がある。すでに、一度自費でシリア料理の食堂を開業した女性もいる。2012年にシリア内戦を受けてガザに避難してきたパレスチナ系シリア人のロタイバ・アヘルさん（女性）は、糖尿病で働くことができないパレスチナ人の夫と6人の子どもたちを支えるため、シリアから持ってきた結婚指輪を含む貴金属を売って、家族で食堂「ヤスミン・シャン」を始めた。しかし、シリア人に対する偏見や女性が働くことへの反感、更には夫の手術などによって食堂を閉めるまでに追い込まれてしまった。それでも、味に定評のあるロタイバさんの食堂に対して個人的に注文をする顧客もあり、自宅で調理しデリバリーすることで少ないながらも収入を得ている。そこで、他のシリア難民と共に食堂を再開できないかと持ちかけられ、話し合いの結果、本活動を計画するに至った。

(2) 活動内容概要

ガザに住むシリア難民であるロタイバ・アヘルさんが一度は開業しながらも、閉業せざるを得なかったシリア料理レストランの再開を支援し、持続可能な経済活動を続けられるようサポートを行った。

研修：ロタイバさん宅にて、2名のシリア難民女性がお手伝いをしながら料理研修を受けた。計画していた経営に関する研修については、ロタイバさんがバンク・オブ・パレスティン銀行が主催するビジネス研修を受ける機会を得たため、このプロジェクト予算では行わなかった。

開業準備：レストランを開業する場所については、いくつかの候補地を確認後、立地や利便性、協力的で理解のあるオーナーの有無や値段などを考慮の上、ロタイバさんが一時レストランを開業していた同じ場所を借りることにした。ガザで同等の食べ物を扱うレストラン等にてマーケットリサーチを行い、メニューと値段を決定した。ガザの人々が情報源として日常的に使用しているソーシャル・メディア（Facebook など）を使い、広報を担当する友人が中心となってレストランの宣伝活動を行った。店のロゴ、メニュー、看板のデザインを行い、印刷作業を行った。開業準備を進めるうちに、ロタイバさんやその家族から、「店の内装でシリアを表現したい、店内に石釜を作りたい」など、積極的に店作りに参加する姿勢が見え始め、協力者も増えていった。店の内装については、ガザの若いアーティストたちを結集し、スーフィーダンサーやモスクなどの美しいイスラムのイメージと、アラビア語のカリグラフィを合わせた絵を一面に描いた。また、使用済みの運送用パレットを無料で譲ってもらい、内装や店内のイスなどにリメイクした。店内に石釜を作り、マナキーシュ（アラブのピザのようなもの）などを焼けるスペースを作った。また、開店前に毎日新聞の取材を受けた（「シリアの味」ガザで人気 戦火逃れた難民、故郷思い” <https://mainichi.jp/articles/20170226/ddm/007/030/150000c>）。

開店イベント：店内準備の遅れやロタイバさんの旦那さんの再入院などによって予定より開業が遅れてしまったが、2017年2月の開店イベント当日は、新しいシリア料理のレストランを楽しみに多くの人が店を訪れた。用意していた料理が足りず、調理を続けながら同時に販売を行った。訪れた多くの人々が、新しい店の誕生を歓迎した。

運営：店舗での販売はもちろん、イベント時には屋台での軽食販売、ケータリングサービスも行い、店内販売のみに頼らない経営体制を整えた。更には、ガザ市内の大型スーパーより、シリアの代表的料理であるクッバ（アラブの肉団子）を店舗販売用の冷凍食品としての注文があり、安定的な収入源となる道筋を得ることができた。

出張販売カート：当初、人が集まる場所や路上でのなどに使用する目的で出張販売カートの作成を予定していたが、実際にプロジェクトを進める中で、カートの使用できる場所などを探すことが難しいことがわかった。人が集まる場所はすでに固定の出張販売カートがあり新規参入は難しく、採算が取れないと判断した。結果、店外販売についてはイベントでの屋台出店を積極的に行い、出店数が限られているイベントでの売り上げは上々だった。また、イベントへの参加は、新規顧客獲得につながった。

フォローアップ：定期的に訪れ、運営状況の聞き取りを行った。

(3) 活動の成果・苦労した点・反省点等

活動の成果：本活動によって、ロタイバさんはレストラン事業を再開することができ、また、効果的な宣伝によって、ビジネスを軌道に乗せることができた。シリアから来たロタイバさんの状況を知り、多くの人からの協力を得ることができた他、ガザの人々にも愛されているおいしいシリア料理が食べられる場所が増えたことを歓迎してくれる多くの人に出会うことができた。ずっと「ガザを出たい」と無気力になっていたロタイバさんの息子らも、レストランでの仕事を心得てやりがいを感じ、また多くの人々と関わることで生活に活力を得ていく様子が見て取れた。

苦労した点：ガザ地区内の深刻な電力不足により、食料の長期保存が大変難しいため、特に肉類や野菜など生ものに関しては、その日使う分量のみを購入する必要があるなど、買い出しに行く手間と時間や、大量購入で得られる割引などの恩恵が得られなかった。今でも、金銭的にジェネレーターで電力を確保することが難しい小売業者には大変厳しい状況が続いている。それでも、計画的に原料を購入するなどしてできる限り対応した。ガザ内の経済状況が益々悪化する中、顧客を確保し続けることは容易ではなかった。今日食料を買うお金があっても、明日にはないかも知れない人がたくさんいる中で新たなビジネスを始めるといふことの厳しさを改めて感じた。一日に3-4時間しか電気がないので、時間によ

てできる作業とできない作業があり、時間の制限を感じざるを得なかった。ロタイバさんが常に店に立って調理を行い、また材料の買い出しを始めとした諸作業を、電気が使える時間を考えながらこなす必要があった。ガザにいる他のシリア難民女性たちの雇用の場になることを目指したが、決まった時間に人を集めて研修を実施することが難しく、また、予定していたようにビジネスを拡大することができなかったため、予定していた10名の研修を行うことができなかった。

反省点：英語をほとんど話すことができないロタイバさんとは、私の片言のアラビア語でのコミュニケーションでは賄いきれなかったため、友人でありガザで奮闘している若い女性企業家で英語も堪能なマジド・マシャラウィさんなどに通訳をお願いしていたため、直接電話で頻繁にやり取りするというような細かいフォローアップをすることができなかった。

その後、事業がうまく行っていたことに対する嫉妬や、文化的に女性がリーダーとなることへの抵抗などによって、当初協力的だったロタイバさんの息子夫婦や周囲の人々から「お店の収入を独り占めしている」などと言われるようになってしまった。その後、息子夫婦は自分たちが投資して作った石釜の代金を返すように迫ってきたため、ロタイバさんはそれを渡して息子夫婦は去り、人手が足りなくなってしまった。ラマダン中などはケータリングの注文が多くその分収入も得られたため、他のシリア人女性やガザでのレストラン業経験者を雇用してビジネスを続ける時期もあったが、人を雇用し続けることは難しかった。

しかしながら、一度は経済活動の手段を失ってしまったロタイバさん一家が、支援に頼らず自立した生活を送るための手立てができたことについては、この事業を行った意義があったと考えている。

(4) 今後のプラン

ガザには、大変優秀で素晴らしいアイデアと企業家精神を持つ人がたくさんいるが、外部との接触が限られていることによってチャンスが得られなかったり、適切なアドバイスを受ける機会がないために事業化することができず、企業を諦めてしまうケースが多い。2016年、2017年の夏には、ガザで起業支援をしようという日本の団体からの呼びかけがあり、私はガザでのコーディネーションを担当し、ビジネスコンテストを開催した。そのような経験からつながった現地の企業家や企業家を支援する団体などとの関係は現在も続いている。引き続き、そのネットワークを生かしてロタイバさんのビジネスはもちろん、他の起業を考える人々へのサポートも続けていく。

2016年のビジネスコンテストを伝える UNRWA の記事

<https://www.unrwa.org/newsroom/press-releases/unrwa-celebrates-winners-gaza-entrepreneur-challenge>

2017年のビジネスコンテストを伝える UNRWA の記事

<https://www.unrwa.org/newsroom/press-releases/gaza-entrepreneur-challenge-unleashing-youth-creativity-and-innovative-ideas>